

総 説 (平成19年度横浜市立大学医学会賞受賞研究)

## 転移性肝癌の予後を改善させる肝切除術式 および周術期治療の確立をめざして

田 中 邦 哉

横浜市立大学大学院医学研究科 消化器病態外科学

**要 旨:** 大腸癌肝転移に対する肝切除は、唯一信頼される治療法である。しかし、肝転移の切除率は依然低率で、切除後の再発は高率であり、一度の肝切除で治癒を期待することはきわめて困難である。一方、近年の化学療法、焼灼治療、重粒子線による放射線療法といった各種治療法の進歩のなかで、本疾患の治療形態は劇的に変化しつつある。本疾患の長期生存を獲得するためには肝切除単独ではなく、切除、焼灼治療、化学療法などを効果的に組み合わせた集学的治療が必須となってきたが、現時点でも切除は最も強力な治療法であり集学的治療の中での手術の果たす役割は大きい。術前化学療法や焼灼治療の併用による肝切除適応の拡大や、補助化学療法の導入、再発時の積極的切除といった、肝切除を軸とした治療戦略によりはじめて長期予後の獲得が可能となる。したがって安全で確実な肝切除術式および周術期治療の確立は本疾患の治療において早急に解決すべき課題である。

**Key words:** 大腸癌肝転移, 肝切除, 化学療法, 焼灼療法, 集学的治療